

札幌新まちづくり計画市民会議
第7回全体会議概要録

日 時 平成16年10月25日(月) 18:00~19:35

場 所 札幌すみれホテル 3階 ヴィオレ

出席者 内田和男 座長 ・ 杉岡直人 副座長 ・ 高田悦子 副座長
荒 紀男 委員 ・ 飯塚優子 委員 ・ 白井 博 委員
大沼義彦 委員 ・ 黒田澄雄 委員 ・ 柴川明子 委員
杉森洋子 委員 ・ 田村丈生 委員 ・ 燕 信子 委員
中井和子 委員 ・ 中島 洋 委員 ・ 平本健太 委員
(欠席: 阿部一司 委員 ・ 伊藤淑子 委員 ・ 岩田美香 委員
大坂 紫 委員 ・ 太田幸雄 委員 ・ 工藤仁美 委員
小林英嗣 委員 ・ 林 雅之 委員)

次 第

- 1 開 会
- 2 議 事
(1) 札幌新まちづくり計画 重点事業編について
(2) その他
- 3 閉会挨拶
- 4 閉 会

議事の概要

はじめに事務局から重点事業編(案)からの変更点について説明がありました。
続いて、今回の計画や市民会議のあり方などについて各委員から意見や感想が述べられるとともに、質疑応答がありました。
最後に、札幌市福迫副市長から挨拶があり、第7回全体会議が終了しました。

各委員からの意見と質疑応答

白井委員

- ・ 評価を客観的な数値目標の形で行うプラス面は分かるが、潜在的なデメリットについても考える必要がある。数値だけでなく質的な面も見るとよいような、もう少しやわらかく評価するようなシステムを考えてほしい。

田村委員

- ・ 公募市民も入った第三者機関で評価を行うのが一番いいと思う。また、その中に今回の委員が若干入るのもいい。

中井委員

- ・ 評価の中でも景観評価は難しい。それは審美性、境界性、快適性といった数値化できないものに魅力があるからだ。計画書にある数値目標を全部クリアすれば良いまちになるのかは分からないが、かなり柔軟な形での評価が望ましい。
- ・ このようにいろいろな方が参加されて、行政の方も参加しながらまちづくりの計画が決まっていったことは画期的なこと。今後、さまざまな領域において計画や事業を始めていくやり方の一つになっていくのではないかな。

中島委員

- ・ 市民会議を市民全体に知ってもらうためにも、市の宣伝力を高めることが課題。モデル事業について新聞に大きく載せるようなパフォーマンスが必要だ。市民に、ごく一部の人のみだけでなく、いろいろな人がかかわることができるのだと思ってもらうのがその最大の目的だ。

Q モデル事業になった清田区地区センターには、どの部局が参加するのか。

A ワークショップに関係部局が入ることになっているが、決定はしていない。区役所の地域振興課、まちづくりセンター、本庁の地域振興部、企画部、高齢者、子育て支援、健康づくり関連を想定している。(事務局)

Q 日程はどうなっているのか。

A 10月1日からワークショップのメンバーを公募している。定員が30名で22日まで募集している。メンバーが決まれば、今年度中に3回、来年度に3回ワークショップを行う。今年度はアイデア、提案をいただき、来年度は具体的な検討に入っていく予定。施設は、今のところ、19年度中に完成する予定である。(事務局)

- ・ 市の広報として、モデル事業のワークショップが始まるときからセンターができるまで密着して映像に記録することを提案したい。

平本委員

- ・ 市民会議のあり方について、二つ印象深いことがある。一つは、特に公募委員が仕事、活動を通して持っている問題意識から、いいまちをつくっていく方策について非常に真剣にお考えになっていること。二つ目は、このメンバーの中で新しいネットワークが構築されていることである。そういった副次的効果があるという面からも、こういう形での計画づくりが一定の意味を持つのだと改めて認識した。

荒委員

- ・ 新しいまちづくりは、市民一人一人がボランティアとしてお互いに助け合うのが基本的な形ではないか。札幌は200万都市としての新しいボランティアのネットワークをこれから確立しなければならないのではないかと感じている。

飯塚委員

- ・ この会議では分科会に分かれたが、核として何を語ればいいのか見えにくかった。
- ・ 話し合われたことをどうまとめていくのかも課題だ。今回はコンサルがまとめて行政とつなぐ形をとったが、別の会議では文章をつくるまで自分たちでやった。行政にとっては、不備のあるものだったと思うが、自分たちの考えていることをまとめやすかった。
- ・ この計画の今後を私たち自身が継続して見ていく仕組みが何かあるだろうかということも考えた。

大沼委員

- ・ 行政と議会、市民会議、それぞれの持ち分がよくわからない部分があった。
- ・ あらかじめ想定されている事業に対して、市民会議の意見がどう反映されるのか不明確な気がした。
- ・ 課題はあるにせよ、こういった市民会議の中で意思決定していくことはすごく大事だと思う。

黒田委員

- ・ 自分たちの住むまちは自分たちで守り育てようということで、今、発寒で地域住民によるレスキュー隊をつくらうと考えている。地域のことが把握できているので、災害時に一人で動けない方のところにもすぐに行ける。自分たちでできることからやろうと、具体的に考えているところだ。

柴川委員

- ・ 願っていることは今も同じで、冬でも遊べるバリアフリー公園と、その横のコミュニティーハウス。一回一回の活動を大切にしていきたい。障がいや年齢を越えているいろいろな人が集まって交流することによって、今起きている子育ての問題や児童虐待の問題、高齢者の問題、障がい者差別の問題などを予防することができるのではないか。

杉森委員

- ・ これから市は何をしようとしているのかよく見えないというのが一般的な意見なので、事業計画はもっと大々的に打ち出しているのではないかと。
- ・ 今、目の前にいる不登校とか引きこもりの子どもたちの状況がもっと良くなってくれれば良いと思う。学校や行政とかいろいろなところがもっと責任を果たしてくれたら、私たちにとってもうれしいことと思う。

燕委員

- ・ ビジョン編には意見が反映されていたと思うが、まとめる段階で自分たちの考えとかけ離れてしまった。重点事業編で出た事業のほとんどを知らないまま議論が行われたが、最初から事業があるのだったら、どうして行政は教えてくれなかったのか。
- ・ この会議において、行政の方は、質問には答えるけれども、市民委員とちゃんとした意見を言い合っていない。今後は、行政も同じ立場で入って、持っているネタも披露して、現実に即した計画をつくっていければいい。
- ・ 重点事業編は縦割りだ。例えば、障がい者については、就労、教育にも大きな問題があるが、私一人がいろいろな分科会に参加することはできない。分科会の設定としてマイノリティーの問題をしっかりと入れていかなければならない。
- ・ 共通のテーマを各分科会でどう扱うかあいまいなまま終わってしまった。今度は、共通の場を設けなければだめだ。
- ・ モデル事業の清田区地区センターでも障がい者福祉が欠けてしまっている。ぜひ障がい者福祉も入れて、まちづくりセンターを考えてほしい。
- ・ ワークショップのメンバーには、こうした取り組みの先駆者である柴川委員のような方に入っていただければいい。

杉岡副座長

- ・ 公募委員が果たす大きな役割は、行政ではなかなかできないことを、具体的な実践として示されることだと思う。
- ・ いろいろな意見が出る中で、ほぼ満遍ない形で重点事業編をつくり上げられたのは、この会議の大きな成果だった。ただ、縦割りではなく、もう少し違う仕組みについて考えていく必要がある。
- ・ この会議の一步先として、市民が提案をした事業に予算がつくということがまちづくりのパートとして動き始めると、相当大きなエネルギーをつくり出せるのではないかと。

高田副座長

- ・ 実践に移すとき、その構想を市民にどうPRしていくかが重要であると思う。
- ・ ボランティアがどれだけ活動するかは、市民の意識改革に尽きる。「旋風」を巻き起こさなければいけない。
- ・ 人を育てることが一番大切であり、そのためには拠点づくりである。

内田座長

- ・ 札幌市が多くの応募者の中から、非常に客観的に耳が痛い意見を言っていただけのメンバーを委員として選んだのは、最初の一步として、積極的に評価すべきである。
- ・ 更地の上に計画をつくるということではないにもかかわらず、それがいかにもできるように見せたというのは市側の欺瞞ではないかと思う。ただ、これからの計画づくりには非常に参考になった。
- ・ 今までの行政は、政策目標を最大公約数的に定め、いかに効率よくその政策を実施するかがポイントだった。しかし、多様化が進んだこれからは、政策目標そのものの設定や、政策をつくっていくプロセスの方が大事になる。この会議は、その最初のステップだったと理解している。
- ・ プロセスが手段ではなく目的になっていくということである。つまり、それに参画しているという意識を持つことによって、まちづくりが進んでいくということ。特に地域にそういう場を多くつくっていくことは可能であるし、必要である。